

Olive News

オリーブ 便り

基本理念 患者さんの権利を尊重し、良質・安全な医療を提供するとともに、医学の教育・研究を推進し、医療の発展に寄与します。



香川大学医学部附属病院 周産期科女性診療科 診療科長 金西賢治

はじめに

妊産婦にとって、地域の生活基盤のある一次施設での分娩は、本人や家族にとり利便性が高く、少子高齢化が問題になる地方にとっても公共性が高いものである反面、緊急時には安全で迅速な搬送体制が求められることから、周産期医療体制の大きな課題の一つとなっています。また、産科医師不足や分娩取り扱い医院の減少により、分娩取り扱い施設の集約化が進み、香川県においても総合周産期母子医療センターなど本来ならハイリスク分娩を取り扱うような施設においても正常分娩の取り扱いが増加し、常勤医の負担の増加なども問題となっています。最近、コロナ禍の影響でさまざまな職種でリモート対応が求められ、医療分野においても遠隔医療の様々な技術が急速に発展してきています。そんな中、モバイル型胎児モニター(以下iCTG[®])が開発され、従来は病院で行えなかった胎児心拍モニタリングが、妊婦自身が装着したiCTG[®]からの胎児心拍情報を自宅から送信し、医師が遠隔である病院で評価することが可能となりました。iCTG[®]の活用により通院の機会を減らし、一次分娩施設から緊急搬送時の胎児心拍情報を搬送先に送信することで新生児予後の改善を図るなど、地域医療での医師不足や搬送体制の安全性を向上するツールとして期待されています。ここでは当院でのiCTG[®]の活用の実際について紹介します。

iCTG[®]の香川県周産期医療における活用

iCTG[®]は、有線装置の病棟での煩雑な管理を解消する目的に従来の機器を軽量かつコードレスで使用できるように開発されました(図1)。インターネットを利用し、自宅や搬送中から妊産婦のCTG情報を大学病院で共有することが可能となっています。防水性と耐久性を備えた構造で、一般の家庭で安心し

香川県の周産期医療における モバイル型胎児モニター(iCTG[®])の活用

て使用できます。当院では地域一次診療施設や助産院からの搬送など、主に東讃地域を中心に母体搬送の受け入れを行っています。母体搬送を受け入れた際、事前に連絡を受けた母子の状態より思った以上に悪い状態で搬送される症例をまれに経験することから、搬送前から搬送中の胎児心拍情報を正確に評価し、緊急帝王切開など適切な対応を迅速に行うためiCTG[®]を活用することとなりました。最近も切迫早産が進行し、子宮収縮が抑制できない妊婦の母体搬送において、救急車の中での胎児心拍情報と陣痛の程度から、早急な帝王切開が必要と判断され、当院に到着後すぐに帝王切開を行うといった例を経験しました。救急車での使用でも問題なく情報が送信され、搬送中も胎児心拍数や子宮収縮を評価することで、胎児の予後を改善できたと考えています。

また、昨年7月から8月にかけて増加した、新型コロナウイルス感染症妊婦の診察では、隔離病棟で妊婦自身に装着していただき、医療従事者の感染防御の観点で大いに活躍しました。また、濃厚接触者になり自宅待機となった妊婦には自宅で装着していただき、遠隔妊婦健診を行うことで妊婦自身の不安を解消するのにも有効でした。

おわりに

周産期医療は総合周産期母子医療センターなど高次医療施設の整備と産科を含む多くの診療科医師や医療スタッフなど人的な努力で大きく発展してきました。しかしながら人的な資源の先行きや人口減少に伴う地域経済の縮小など、これまでの医療では支えきれない問題も大きくなってきています。

今後も、これらの問題点と向き合いながら、コロナ禍で発展した新たな医療技術を活用し、新たなシステムを構築することで香川県の周産期医療をより良い方向に進めていければと考えています。



図1 外測陣痛計(緑)と胎児心拍計(ピンク)

救急看護認定看護師の紹介

香川大学医学部附属病院 救命救急センター

看護師長 國方 美佐

こんにちは。救急看護認定看護師の國方です。私は入職後、内科や産婦人科病棟での勤務を経て、救急部門へ異動となりました。救急では治療や看護の甲斐あって元気になる方もいらっしゃれば、突然命を失ってしまう方もいらっしゃいます。様々な場面を経験する中で、救える命を救うための知識や技術をさらに学びたいと思うようになりました。そして上司や職場の理解もあり、認定看護師になるため1年間の研修に参加させていただき、救急看護について深く学ぶ機会を得ました。現在実践する機会は少ないのですが、後輩たちが他のスタッフへ指導している姿を、遠い昔の自分と重ねながら目を細めて眺めています。

今年度からは、来年度運航開始予定のドクターヘリの準備を担当しています。現在香川県で傷病者をヘリ搬送する場合、多くは香川県の防災ヘリを使用しています。ドクターヘリは防災ヘリと異なり、フライトドクターとフライトナースが必ず同乗しています。これまで病院に着いてから開始していた治療がいち早く開始できるため、患者の救命率向上



に繋がることを期待されています。

ドクターヘリは医師、看護師だけではなく、他施設や他部門、県民の皆さんの協力なしでは運航できません。今後も皆さんの協力を得ながら、無事にドクターヘリが運航開始できるよう準備を進めていきたいと思えます。1月からは、実際の機体を使った訓練も開始しています。空を見上げて、ぜひドクターヘリを見つけてみてください。

令和3年度Kagawa Infection Seminarを開催しました

香川大学医学部附属病院 感染症教育センター

12月14日(火)18時30分から、令和3年度Kagawa Infection Seminarを開催しました。本セミナーは、感染症についての知識を深めることで香川県で活躍する医療従事者の感染症に関するスキルと技術の底上げに繋げることを目的に、平成25年度から香川大学医学部感染症講座、平成28年度からは香川県立中央病院が主催となり開催していました。

今年度からは、昨年4月に設置された香川大学医学部附属病院感染症教育センターが主催となり、香川県からの委託事業として実施しました。今回は、Zoomによるweb開催とし、268名のご参加をいただきました。

感染症教育センターの横田 恭子先生の司会のもと、門脇病院長からのご挨拶に続き、大阪大学大学院医学系研究科感染制御学教授 忽那 賢志先生により「新型コロナウイルス感染症～診断と治療の基本、この冬に向けての治療薬の選択について～」と題した内容をわかりやすくお話いただきました。まだまだ予断を許さない状況の中で



感染症を志す若い世代に向けてのメッセージもいただき、大変有意義な会となりました。

令和3年度緩和ケア研修会を開催しました

香川大学医学部 医療支援課

12月12日(日)に令和3年度緩和ケア研修会を開催しました。

この研修会は、がん診療に携わる全ての医師が基本的な緩和ケアを正しく理解し、緩和ケアに関する知識、技術、態度を習得することで、緩和ケアが診断の時からより効果的に提供されることを目的としています。

今回の研修会は、特に新型コロナウイルス感染症対策を万全に期した上で実施する必要があることから、院内のみの参加者として27名が参加しました。どの参加者も熱心に講義を受講し、グループワークやロールプレイにも積極的に意見交換する場面が見られ、非常に有意義な研修会となりました。



先手必勝の花粉症治療

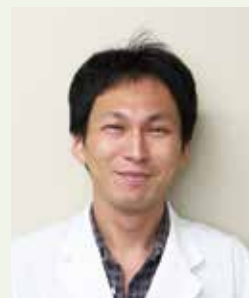
香川大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 助教 秋山貢佐

毎年春先になると花粉症のシーズンがやって来ることを憂鬱に感じている方は少なくないと思います。最新の調査では花粉症がある人の割合は40%近くになると報告されています。すなわち香川県内でも症状の差はありますがスギ・ヒノキに代表される、花粉症の患者さんが40万～50万人ほどは存在することになります。2020年は花粉の飛散が極端に少なかったことや、マスク着用が徹底されていたことなどから例年よりも症状が軽いと感じる方が多かったと思われます。2022年のスギ・ヒノキ花粉の飛散は例年よりも少なめと予想されます。個人の症状と花粉飛散量は必ずしも相関しない場合があり、花粉症がひどい人にとってはマスクなどでの対応はもちろん大切ですが、それだけでは不十分となる可能性があります。

花粉症の治療で大切なことは、早期から治療を開始することです(これを初期療法といいます)。初期療法は少しでも症状が出始めたと感じたとき、もしくは花粉の飛散が開始になったと報道された時期から開始するのが適切です。早期から治療を始めることでそのシーズンを楽に過ごすことができ、使用する薬の量や種類を減らすことができますが、実際には3月中旬以降で症状がピークになり我

慢できなくなってから病院に駆け込むという患者さんが多いのが現状です。思い当たる節のある方に心がけていただきたいのは、花粉の飛散開始は例年バレンタインデーぐらいからですので、今年はチョコレートを買いに行くついでに病院か薬局にもお寄りいただき治療を始めていただくということです(ちなみにホワイトデーあたりでスギ花粉の飛散量がピークとなります)。近年はドラッグストアなどで比較的新しいタイプの花粉尘に対する飲み薬を購入できるようになっており(病院で処方されるのと同じ使い方になります)、症状の比較的軽い方はご自分で薬を購入されて使用することでも対応可能です。しかし鼻づまりがひどい方などはこれでは不十分な場合が多いため受診された方がよいと考えられます。

今はコロナの影響があり人前でしゃみや咳をすることがはばかられる時代です。花粉症の治療が飛沫感染の機会を減らすことにつながる可能性もあり、とにかく早めに対策を始めましょう。



毎日新聞「四国健康ナビ」2021年1月26日掲載分

看護師の特定行為研修【OSCE】を開催しました

香川大学医学部附属病院 特定行為研修センター

OSCEは「Objective Structured Clinical Examination」の頭文字を取って、通称「オスキー」と呼ばれる試験です。病院実習に先立ち、実際の現場を想定した状況下で、研修生は判断力・技術力・患者さんに対する態度など一連の技能を実演して評価を受けます。今年度は10月下旬から「気管カニューレの交換」「末梢留置型中心静脈用カテーテルの挿入」「直接動脈穿刺法による採血」など5つの特定行為のOSCEを開催しました。研修生は指導医から丁寧な指導を受け、自己練習も重ね、OSCE本番ではその成果を存分に発揮し、評価医から高評価を得ることができました。11月以降は病院での実技実習に励んでいます。



特定行為研修にご興味のある方は、ホームページをご覧ください。

特定行為研修センターホームページ <https://kagawadai-tokutei.jp/>



臨床研究に関するご案内

香川大学医学部 倫理委員会委員長

香川大学医学部附属病院 治験審査委員会委員長

香川大学医学部附属病院 臨床研究審査委員会委員長

香川大学医学部附属病院では、診療に伴って取得した患者さんの貴重な個人情報を含む記録や尿・血液等の検査試料、生検組織(内視鏡検査で検査のために採取した組織等)又は摘出組織等の試料が発生します。

それら記録試料等を本院は、医療機関としてだけでなく、教育研究機関として所定の目的に利用させていただきたいと思っておりますので、患者さんのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

前向き研究(研究を立案、開始してから新たに生じる事象について調査する研究)に患者さんの情報を利用する場合は、書面により患者さんの同意をいただくことといたします。後向き研究(過去の事象について調査する研究)の場合は下記URLに示しております。

利用目的の中に同意しがたいものがある場合は、1階外来ロビー内個人情報相談窓口または各診療科までお申し出ください。特段のお申し出がない場合は、上記の利用目的のために患者さんの個人情報を利用することに対して同意が得られたものとさせていただきます。

臨床研究に関するご案内URL <http://www.med.kagawa-u.ac.jp/hosp/about/rinsyo/>

ケーブルTVで放送中



詳しくはこちら



2月のテーマ 「そのコレステロール高値は本当に食事のせい？」

～家庭でもできる家族性高コレステロール血症のチェック方法～

3月のテーマ 「にきびQ&A『にきびは病気ですか?』」

イベントカレンダー 2022年2月 予定表

月日	時間	場所	名称及び内容	担当	連絡先
2/19 ⊕	9:00~17:00	WEB開催	日本ペインクリニック学会 第2回 中国・四国支部学術集会	麻酔・ ペインクリニック科	(087)891-2223

編集委員会 (50音順)

(2022年1月現在)

阿部(看護)、岡内(外来)、金西(副病院長)、亀田(病棟)、木内(検査)、小坂(薬剤)、圖子(管理)、筒井(経営企画)、仁尾(医療支援)、門田(放射線)、横井(医療情報)、横川(総務)、和氣(医事)〔委員長 門脇病院長〕